

入力練習 8

私は、戦国武将の一人となり、興味があり、その中でも波乱の人生を過ごした伊達政宗に興味を持った。大河ドラマを見たことがきっかけだが、ドラマの原作である山岡荘八著の『伊達政宗』を読み、ますます興味を持った。学生時代には、仙台や米沢など政宗ゆかりの地を訪れ、政宗の足跡をたどる旅をするようにまでなった。ある意味、私の人生観に大きな影響を与えてくれた作品に出会ったのだ。

山岡荘八著の『伊達政宗』は、もちろん伊達政宗の一生を描いた物語だ。この作品の中で山岡荘八は、「伊達男」政宗の人生観を次のように表している。「人間は、この世へ客に出された旅人である。客の身なれば、あまり不平も申すまじ。」

つまり、身体というものは借り物で精神のみ自分のものであり、だからこそ借り物の身体を大切に扱い、肉体の限界を知った行動を取るべきであるとしているのだ。生も死も肉体を借りることで、この世に具現化しただけのことであるから、この世に対して恨みつらみを持たず、この世に招いてくれたことに対する恩返しをするべき旅に出ていくというわけだ。

そして、政宗は人生の最期に次のような辞世の歌を詠んでいる。

「曇りなき 心の月を さきたてて うき世の闇を 晴れてこそゆく」

この辞世の歌にも、前述の「旅人」の行為である「ゆく」ということが詠まれている。この言葉は、前向きな姿勢を表したもので、「曇りなき心で浮世の闇を照らしていく」という表現も、「自分」と「心」と「社会」を前向きにとらえて表現しているものなのだ。政宗の人生は、「伊達〇〇」という言葉の語源となるほど華美なもので、前向きで大きな野望を持ち、どんな困難にも負けずに立ち向かっていった人生であった。この人生に対し、非常に満足した様子がこの歌から読み取れるのだ。

また、晩年政宗が詠んだ詩の中には、「馬上で戦い青春の日々を過ごした。世の中は平和になり 私も年をとった。戦国の世を生き延びられたのは、天のお許しがあったのだろう。これからは楽しもうではないか。」という意味のものがある。まさに、政宗の一生を詠んだ詩であり、人生を全力で駆けてきたことが感じられる。私は特に最後の一文が心に残り、普段から「どうせやるなら何事も楽しみを持って実行する」と心に言い聞かせ生活している。政宗ほどの重責を負った人生を歩んだわけではないが、政宗にあやかり人生を過ごせたならよいと思っている。

以上 987文字